

絵本としての平家物語

出口 久徳

一 平家物語絵の歴史と絵本の種類

『平家物語』は、多様な諸本や語り物としてだけではなく、絵画によっても広まっていた。記録上では、十四世紀半ば頃、『入木口伝抄』に「山上平家絵詞」との記事が見え、これは比叡山で所有されていた平家物語絵と考えられる¹⁾。その後も、『看聞日記』や『実隆公記』などに記事が見える。絵の詳細については明らかでない点も多いが²⁾、内容的には、屋島合戦に関わるものが多かったように、禅僧の画賛にもいくつか残り³⁾、好まれた画題だといえることがわかる。

現存する絵本（絵入り写本・冊子本）、絵巻としては、近世期制作のものが多い⁴⁾。絵本の特徴としては、もともと十二巻の物語を二十巻に仕立てる点である。三十巻本にするのは、真田宝物館蔵本、アメリカ・プリンストン大学蔵本、島津家本、アイルランド・チェスター・ビーターライブラリー蔵本（現存するのは二冊のみ）などがある。ただし、巻の区切りなど必ずしも一定ではない。その他には、神奈川県立歴史博物館蔵本は十二巻を二分割した二十四冊本、熊本大学北岡文庫蔵本は三分割した三十六冊本となる。なお、全巻の写真版（中央公論社）が刊行され、平家物語関係の絵画では最も著名な林原美術館蔵『平家物語絵巻』は十二巻を三分割した三十六巻本である。一方で、近年、公開された『源平盛衰記絵巻』は十二巻本で（通常は四十八巻）、こちらは『平家物語』の十二巻を意識したものかもしれない。

今回明らかにされた明星大学蔵本（本報告書、柴田・山本論参照）

は、十二巻本（ただし巻一・十二欠）である点、まず構成面から見ても注目できる。

なお、各テキストの元にした絵画やテキスト間の関係など、明らかでない点も少なくないが、最初に刊行された絵入り版本である明暦二年版（一六五六）と何らかの関係があると考えられるテキストがある。チェスターライブラリー蔵本は、明暦版的な絵と細部まで一致する例が見られる⁵⁾。真田宝物館蔵本（以下、真田本）は、チェスターライブラリー蔵本ほどの一致度はないものの、明暦版的な絵をふまえて描かれていると思われる絵も少なくなく、分析の際の一つの指標になる。プリンストン大学蔵本や神奈川県立歴史博物館蔵本にも明暦版との関連が考えられる絵が部分的に確認できる。

一方、真田本の真田家、熊本大学北岡文庫蔵本の細川家など、大名家に伝来したテキストがあり、真田本はいずれかの夫人の嫁入り本ではないかとの見方もある⁶⁾。現存する絵本、絵巻はいわゆるダイジェスト版ではなく、何らかの物語本文⁷⁾を用いて制作されている。大抵な作品でもあり、それなりの経済力が必要だったに違いない。

美術館の展示や図録類などで、個々のテキストが紹介されることもあるが、他の物語絵画に比べても平家物語絵の研究はそれほど多いわけではなく課題も少なくない。まずは、個々のテキストと向き合い、その性格を明らかにしていく作業が必要であろう。本稿では、真田本を例として挿絵に見える特徴を考えていきたい。

二 絵本を読む

まず、物語の前半の山場の一つ、平家打倒の密議がなされた鹿谷事件が発覚した以降、謀議に関わった藤原成親・成経の父子、康頼入道、俊寛や彼等の家族の描かれ方を例に、真田本を検討していこう。

卷二相当（真田本は三十巻仕立てなので、卷二ではないが、十二巻の巻で示した。以下も同様の示し方をした）の「少将乞請の事」では、成経の舅である門脇宰相教盛（平清盛の弟）が清盛を説得したことで、成経は帰されることとなった。真田本のこの段の絵では、宿所に戻ってきた牛車に乗る成経の姿が画面下側に、画面上側に夫の帰りを待つ北方達が描かれる。なおこの場面は明暦版にはない。

卷二「大納言死去の事」では、備前国に流罪となっていた成親の死が語られる。断崖から突き落とされて菱に刺さり命を落とす姿が印象的である。林原美術館蔵絵巻には、無残にも串刺しになった成親が描かれている。真田本は死の場面ではなく、夫の死の報告を受ける北方が描かれている。明暦版にも同様に北方が描かれているのだが、成親を描くのか、北方を描くのかの場面選択によって受ける印象はずいぶん違ってくるだろう。

卷二「卒塔婆流の事」では、鬼界島に流罪となった康頼入道と成経が卒塔婆を流す。真田本ではその卒塔婆が康頼の老母のもとに届けられた場面が描かれる。林原美術館蔵絵巻や明暦版をはじめ絵入り版本諸本では卒塔婆を流す場面が絵になるが、真田本にはこの定番ともいえる場面は描かれない。息子の思いを受け止めた老母の姿に注目しておきたい。

卷三「有王の事」では、有王が鬼界島に俊寛を訪ねた様子が語られる。真田本では、その後、島から戻った有王が俊寛の死を娘に報告する場面が描かれる。これは明暦版にはない。

夫の帰りを待つ北方、死の報告を受ける北方、息子の思いを受けとめる母親、父の死の報告を受ける娘。真田本を読み進めると、そうした女達の姿が印象的に映る。成親の悲惨な最期、鬼界島での成経たちの様子、鬼界島に取り残された俊寛の無念、有王と俊寛の交流など、

鹿谷事件の後日談をめぐっては男達の物語が注目されることが多い。その一方で、さまざまな事態を受けとめていた女達の姿を描き出し、男達を支えていたもう一つの物語の存在を真田本は照らし出す。物語本文に記述がないわけではないが、そのような場面選択がなされ、描かれることで彼女たちの存在に気づかされるのである。

他に目を移すと、卷三「無文の事」では、平清盛の嫡男の重盛からその息子の維盛へと無文の太刀が渡される様子が語られる。維盛は、重盛に相伝されていた「小鳥」の太刀を授かるのではと考えたが、渡されたのは葬儀の際に用いる無文の太刀であった。これは、自らの死を予見した重盛のとった行動であった。真田本では、病の床についていた重盛が起きあがり脇息に肘をおき維盛と対面する様子が描かれる。その他に、画面上側に、二人のそれぞれの北方と思われる女達が描かれる点に注目したい。明暦版も同じ場面が絵になるが、女達は描かれない。明暦版以外の絵入り版本でも女の姿は描かれない。真田本では、二人の北方が、家（小松家）にとつて重要な場を見守る存在として描かれている。

卷八「緒環の事」では、福原を落ちた平家一門が九州まで逃れてくる。この段では、九州の地で勢力を拡大していた緒方三郎の先祖の話が語られる。女のもとにかよっていた正体がわからない男に糸をつけ追っていくと、男は大蛇だったとの話（『古事記』等にもみられる三輪山系の説話）であり、絵入り版本諸本や林原美術館蔵絵巻では、大蛇出現の場面が描かれる。大蛇が現れる場面は印象深く、この章段の定番の図像ともいえるべきものであった。しかし、真田本では出現場面は描かれず、女が大蛇との間の子ども（「あかがり大太」という名で、緒方の祖先）の相手をする様子が描かれる。祖先にあたる人物を大事に育てる母親の姿を描き出す点に注目したい。

これまで述べてきた例では、妻・娘・母親としての役割を果たし男達(家)を支えている女達の姿が構造化されている点を確認しておきたい。

三 平家物語絵本の周辺

ここまで女達の姿に注目して論じてきた。先に述べたが、真田本は嫁入り本として制作されたのではないかという見方もある。近世の女達、特に武家にとっては『平家物語』はどのような意味があったのだろうか。

『平家物語』などの軍記物語は、大名家の嫁入り本としてふさわしいものとの認識があったようだ。例えば、寛政五年刊(一七九三)『婚礼道具図集』「書物寸法」の項に、『源平盛衰記』『太平記』『曾我物語』『吾妻鏡』等が見える。また、尾張藩の三代藩主綱誠夫人、新君(一六五四〜九二)の蔵書の例も報告されている。嫁入り本と思われる新君の蒔絵箱付けの一連の書物の中に、『吾妻鏡』『源平盛衰記』『王代記』(中国と日本の皇統を記した書)、『帝鑑図説』等があった。そうしたテキストから、大名家夫人の要求された教養がうかがえる。

近世期のいわゆる女訓書に目を向けると、『平家物語』や『源平盛衰記』を典拠とした話が様々に利用されていた。女訓書のなかでも、比較的まとまって『平家物語』や『源平盛衰記』を利用するものとして、寛文元年刊(一六六〇)『本朝女鑑』がある¹⁰。巻五・八話「仏御前」では、『平家物語』巻一の「祇王」の段を引き、仏御前が権力者清盛の庇護を捨て抜け出し出家したことを称えて、その行為を「節に臨みて禄を忘る、利を捨てて道に趨くとは此謂なり」と評している。巻五・十話「源渡妻(袈裟御前)」では、袈裟御前が計って遠藤武者

盛遠(文覚)に自らの首を斬らせた行為を「義を重くして死を軽くするは人たる道也、生を求めて仁を残ふことなしと云へるは、この事也」とする。『平家物語』等の話をほぼそのままに収めながらも、女性としての生き方の問題として意味付けている。巻八・二話「建礼門院」では、建礼門院の生涯を簡略に語り、平家一門の霊を弔う姿を称え、女性の生き方の手本とする。さらに、末尾に、一字下げで(注釈の意識か)、『源平盛衰記』等に記される兄の平宗盛との近親相姦を「まさなき虚言」と否定する。また、大原に隠遁したのは、後白河院の求愛を逃れるためであったとも記す。女の生き方の手本として、建礼門院の醜聞を否定しようとの意図がうかがえる。真田本のような絵本と女訓書とはテキストの位相が異なり、同列に論じることはいえないだろう。だが、『平家物語』等に語られた女達の姿から教訓を引き出す読まれ方がされていた点を確認しておきたい。

また、嫁入り本というテキストの性格と絵の表現がどのような関係性を結ぶのかも問題である。この点についてメラニー・トレーデーは、ケルン東洋美術館蔵『大職冠図屏風』を受容美学の方法で分析し、受容者としての女性を意識したテキストと論じている。屏風中の女の描かれ方に注目して、武家の家での理想的な女性の振るまい方を絵画化している点を指摘している。屏風に描かれた物語を見る女性は、図像を媒介にして、男の側(家の論理の側)からの理想的な女性の振る舞いを内面化していくであろうとする。トレーデー論は、嫁入り本というテキストの社会的な意味と絵の表現を関係づけ、その表現の機能まで論ずる点に特徴がある。他の嫁入り本の議論よりも深い追究がなされているといえる。

ここであらためて真田本に戻ると、男(親・夫・子)の帰りを待ちつつ家を守る、男の死を受け止める(菩提を弔う)、男達を脇でしっ

かりと見守るなど、男の論理・家の論理から見たあるべき姿が描き込まれているといえる。

享受の実態として、真田本がどこまで女達に読まれていたのかは明らかではない。保存状態を見てもそれほど頻繁に読んでいたとは思えず、丁寧に扱われていたことがうかがえる。また、制作の意図が教訓的なものであったとも考えにくい。だが、制作の際に想定される読者として女（夫人）が意識され、女達の姿が意識的に描かれた可能性はある。そして、結果的に男側（家側）から見望ましい女性の姿が描かれる図が多くなったことは指摘できるかもしれない。今後、具体的な制作事情や享受の実態が明らかになれば、より踏みこんだ分析も可能になるはずだ。

ところで、近年の美術史研究の一つの特徴的な動向として、ジェンダーの視点からのテキスト分析がある。例えば、千野香織・池田忍・亀井若菜¹²によるハーバード大学蔵の土佐光信筆『源氏物語画帖』の研究では、物語本文に語られた恋の描写を置き去りにして、男達の宴会を描いた場面が多いことに注目する。それは、公家や武家の間で源氏絵の贈答を媒介にした交流が行われた事情に起因するのだろうと述べる。千野等は、男が描かれた、男のための源氏絵のあり方を問題にした。三田村雅子¹³も近世の源氏絵をめぐり、同様に論じている。

現在では、一般的には、『源氏物語』が女性向きで、『平家物語』が男性向きとのイメージが強いように思う。それとは逆の受容もあることも考えておきたい。

四 絵本研究の今後

本稿では、真田本を例に、嫁入り本の可能性を視野に入れつつ、絵の中の女達の表現について述べてきた。こうした特徴は他のテキスト

でもあてはまるのかは、今後の検討が必要である。また、シンポジウムでの山本氏の明星大学蔵本についての発表で、悲惨な場面があまり描かれなかったことや荒武者たちの顔も優美な表現で描かれていることなどの指摘がなされた。本稿で扱った真田本との関連は今後の課題だが、両者を詳細に検討することで、今後の研究の指針が得られるかもしれない。

他のテキストもそのテキストにそくして、表現の志向性を探ることをしなければならぬ。また、各テキスト間の絵の関係も今後の研究の課題であろう。課題は少なくないが、今後も一つ一つのテキストをより丁寧に分析していきたいと思う。

（付記）

*本稿は、二〇〇八年一月二二日に明星大学青梅校舎で行われた公開シンポジウム「挿絵で読む平家物語―華麗なる奈良絵本・絵巻の世界―」での同題の口頭発表の一部をもとにしたものです。発表と執筆の機会をいただけたことに感謝申し上げます。

*真田宝物館蔵本の調査に関しては、同館の関係者、特に原田和彦氏に大変お世話になりました。末筆ながら、感謝申し上げます。

*本稿は、佐藤和彦他『図説 平家物語』（河出書房新社、二〇〇四年）に書いた真田宝物館蔵本の解説と、内容的に一部重なる部分があります。あわせてお読みいただけると幸いです。

〔註〕

¹落合博志「『入木口伝抄』について―国文学資料としての考察―」（『法政大学教養部紀要 人文科学編』七八号、一九九一年二月）、落合「鎌倉末期における『平家物語』享受資料の二、三について」（『軍記と語り物』二七号、一九九一年三月）。

²記録類に残る中世の平家物語絵をめぐっては、以下の論を参照。宮次男『合戦絵巻』（角川書店、一九七七年）、小松茂美「林原美術館蔵『平家物語絵巻』のすべて」（『平家物語絵巻 巻第十二』中央公論社、一九九二年）、櫻井陽子「『看聞日記』に見られる平家享受」（『伏見宮文化圏の研究―学芸の享受と想像の場として―（平成一〇年〜一一年度科学研究費（『基盤研究C』）研究報告書）』二〇〇〇年三月）など。なお、平家物語絵の概説の拙論（『平家物語を知る事典』（東京堂出版、二〇〇五年）所収）もある。

また、中世制作とされる白描の『平家物語絵巻』が三点、現存する。詳細は以下の論を参照。梅津次郎「伝光信筆平家物語絵巻」（『絵巻物叢誌』法蔵館、一九七二年）、静嘉堂文库美術館蔵『室町の絵画展―詩画軸・屏風・障屏画―』（一九九六年）、サントリー美術館編『源平の美学―平家物語の時代―』（二〇〇二年）など。

³榊原千鶴「1600年前後―軍記物語と扇面画―五山僧による軍記物語享受の一端」（『国文学』学燈社、四五巻七号、二〇〇〇年六月）

⁴現存するテキストでは、冊子形式の絵入り写本が多い。絵巻で全巻が残るのは、林原美術館蔵本のみ。なお、『源平盛衰記絵巻』については、加美宏・解説、狩野博幸・解説『源平盛衰記絵巻全十二巻』（青幻舎、二〇〇八年）を参照。

⁵チエスター・ビーティ・ライブラリー蔵本については以下の拙論を参照。出口「解題・平家物語」（国文学研究資料館・チエスター・ビーティ・ライブラリー編『チエスター・ビーティ・ライブラリー絵巻絵本解題目録 解題篇』勉誠出版、二〇〇二年）、出口「絵入り本平家物語をめぐって」（『立教大学大学院 日本文学論叢』創刊号、二〇〇一年三月）

⁶滝澤貞夫「松代本『平家物語』考」（『松代』一〇号、一九九七年三月）

⁷『平家物語』本文は、一方系流布本でおそらくは版本を用いていることが推測される。なお、林原美術館蔵絵巻の底本で複数の版本が用いられていることについて、櫻井陽子氏が論じている（『平家物語の形成と受容』（汲古書院、二〇〇一年））。『源平盛衰記絵巻』は全巻に及ぶものではなくデジタル版的な性格を持つ。

⁸俊寛の足摺の場面などが著名。能や浄瑠璃などで取り上げられる。

⁹榊原千鶴『平家物語 創造と享受』（三弥井書店、一九九七年）

¹⁰以下の指摘は濱田啓介氏（『近世小説 營為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年）による。なお、女訓書、および女訓書と軍記物語の関係については、青山常一『仮名草子女訓文芸の研究』（桜楓社、一九八二年）や榊原千鶴氏の一連の論（前掲書や「女性が学ぶということ―女訓から考える軍記物語」（『日本文学』五一巻一二号、二〇〇二年一二月）などを参考にした。

¹¹メラニー・トレデー「ケルン東洋美術館蔵『大職冠絵』の受容美学的考察」（『美術史』一四一号、一九九六年）

¹²千野香織、亀井若菜、池田忍「ハーヴァード大学美術館蔵『源氏物語画帖』をめぐる諸問題」（『国華』一二二二号、一九九八年）

¹³三谷邦明氏・三田村雅子『源氏物語絵巻の謎を読み解く』（角川書店、一九九七年）の三田村氏執筆部分。

